

## 《企画書》

提出者 馬渡恵  
ペンネーム 万葉めー

### 【タイトル】あなたをささえることば 万葉の情緒

#### 【概要】

本企画においては、日本のことばと古典の情緒が、今までどれほどの時をかけて人々をささえ「国土とひとの絆」をつくってきたか、という自分なりの気づきを文章にしました。奈良時代に編纂された万葉集には1300年前の世界と現代を行き来できる、見立ての力と当時の感情があります。AIによって自動生成された文章が多くなってきた現代だからこそ、情緒ある日本の言葉の尊さに気づききっかけをつくりたい。古き良き言葉がいかに自分を救ってくれたか、そして古典の万葉集にどのように自分は向かい合い、手探りをしながら万葉集を今様に表現しているか、を書き記していきます。

読んでくださる読者のかたに、千年の時を飛び越えて背中を押してくれる詩歌との出会いがありますようにと心を込めました。あなたのそばに静かに寄りそう一冊をお届けしたいと思っています。国土とひとの絆は日本に限ったことではありません。言祝ぐ詩歌の力が世界中の標準となり平和が広がっていく、小さな歌人からの一石を投じる本にしていきたいと願っています。

#### 【想定する読者ターゲット】

- ① 30～80代の男女
- ② 人生の最後について考えている人
- ③ ひとりの時間に寂しさを感じている人
- ④ 行動を後押ししてほしい人

#### 【構成案】

##### 第1章 やまとで言葉とむすびつく

- ・ある言葉に気づいたとき、光につつまれた
- ・文字と言葉に心を縛られて
- ・よき言葉 巨木が伝えてくれたこと

万葉歌) 志貴皇子

##### 第2章 言葉はギアをかえられる

- ・壊れた心を切り替えた、幸せなお金という言葉
- ・お金という存在がなかった時代
- ・情熱を実現するひとのちから 長屋王は何をもたらしたか

万葉歌) 長屋王

##### 第3章 ことばの情緒を掘り起こす

- ・歌詠みとして母が教えてくれたこと
- ・働き続けた父が遺したことば

・戦争、祖父たちが失ったものとかえってきたもの

万葉歌) 防人の歌

#### 第4章 万葉集と海に漕ぎ出す

- ・デジタルに助けを借りる
- ・ひとりきりのインターネットラジオ
- ・土地を言祝ぐ、万葉集朗唱

万葉歌) 大伴家持

#### 第5章 ことほぎのやわらかいリボンの世界にかけたい

- ・海のむこうの詩人たち
- ・ことばをつむぎ心の平安を届けられたら
- ・今があなたのつくりたかった世界であるように

万葉歌) 舒明天皇

#### 【サンプル原稿】

#### あなたをささえることば 万葉の情緒

- ・やまとで言葉とむすびつく

「ひとは草」電車で京都から奈良に向かっていた時に降ってきた言葉です。車窓の風景は、なだらかな山並みと田んぼの風景が続き、緑の稜線は万葉集が編まれた1300年前と同じなのだろうかと眺めていたとき、目の奥でかちりと何かはまった音がしました。読んでいた本の中では、かつての日本人の死の概念には死、萎、などそれぞれに違った文字があてはめられていたということが書いてありました。民草としての人は、その命果てるときには植物が萎れるように自然の循環の中で分解されていく、自然のなかの土にもどることは、しごくまっとうで幸せなことなのだ、と腑に落ちました。窓の外の風景が光るように思えた瞬間でした。

そのときは、人生で最悪と言っていいほどの虚無感に包まれていたときでした。数か月の間に、母そして父の順に見送り、年の離れた兄とは兄の配偶者を通して連絡を絶たれました。ストレスで倒れしばしば過呼吸の発作に見舞われ、死、というものが突然身近になり、生活が破壊されたような錯覚に陥っていたのです。それまでは人と人とのつながりはおだやかに流れていくものだと思っていた。しかし死という刀は、突然自分と自分の精神を破壊しにやってくるものだ、などと自分の経験からそのように死を心の引き出しに分類していました。そして自分の思い込みによる影響から、からだがかわれていくのを痛感していました。

人は植物と同じように朽ちて土になってゆくこと、萎れて土に戻れることの幸せを、言葉を通して気づきました。そして古典である万葉集にふれていく過程でさらに気づきを得ることができました。情緒と結ばれていた国土、その情緒と国土との絆は、のこされた古い和歌から感じることができます。死から萎へ、その概念の転換は大地とのきずなをあらわす言葉です。季節が巡るように、植物が種をのこすように、やまとの国の大地が今まで続いてきたことと日本語が存続してきたことへの感謝を、言葉の神様に捧げたいと思います。

石（いわ）ばしる垂水（たるみ）の上のさわらびの萌え出づる春になりけるかも

奈良と京都の境にある奈良豆比子神社では、この歌を詠んだ志貴皇子がお祀りされています。志貴皇子は撰言善司（よきことえらぶつかさ）以外の役職につくこともなく、亡くなった後に春日宮天皇（田原天皇）と称されただけの不遇のひとでした。神社の裏手にはそのころから今もずっとたたずんでいる巨木だけが時代を伝えています。

・言葉はギアをかえられる

相続にかかわる一連の作業の中で、お金という存在への不信感から、安心して呼吸をできず過呼吸発作のおこる日常でした。しかし、生きていく日常生活でも少しずつ変化が始まりました。ギアをかえてくれた言葉と考え方に出会えたのです。本田健さんの「Happy Money」幸せなお金、という言葉です。お金は悪ではない、愛情のあらわれとしてのお金に向き合うことで、まわりの景色は少しずつ変化していきました。

そもそもお金はいつの頃から人を支配するようになったのでしょうか。万葉集の時代にはまだ貨幣は存在していませんでした。今でいうところの税として、お米、布や労働力、警備の任務などをもって納めていました。国外に向けてはどのようなものがあつたのでしょうか。海外とのやりとりの一例として、仏教伝来を目的に平城京の政治的運営を担当していた長屋王の尽力がありました。高僧を日本へ呼び寄せるために千着の袈裟を唐へ送り、鑑真和上の心を動かしたのです。その袈裟には漢詩の刺繍がすべて施されていたそうです。

「山川異域 風月同天 寄諸仏子 共結来縁」

自然は異なっているが、同じ天のもと風も月もある、仏の弟子に袈裟をお送りします、ご縁を結ぼうではありませんか。意識ではありますが、この漢詩が千着の袈裟に刺繍されて海の向こうから届いたら、高僧も心が動かされたのではないのでしょうか。のちに鑑真和上は、来日に何度も失敗し視力を失っても、最後は平城京まで足を運んでくださったのです。この漢詩の刺繍が気持ちをつないでくれたのではないだろうかと思われたい。残念ながら長屋王は政変により命を絶つことになってしまいました。万葉集にのこる長屋王の歌を一首あげておきます。

岩が根のごしき山を越えかねて音には泣くとも色に出でめやも

ごつごつとした山をこえられずつい泣いたとしても、あの子を思っていることは人前を出したりはしない（筆者意識）

・ことばの情緒を掘り起こす

私の母は歌人でした。そして祖父も国語教師として外地で勤務しながら歌を詠み、万葉集を研究していたそうです。私も長く短歌を詠んでいます。和歌は今では短歌とよばれています。現代では口語で 57577 の言葉を紡ぎ、若き歌人たちはそれぞれに個人の心情を吐露しています。それでは日本で最初の和歌とはいったいどんな和歌だったのでしょうか。3 1 の音で最初に詠まれた和歌は、スサノオノミコトの詠んだといわれているこの歌です。

八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を

妻をめとりそして愛する妻を守る、そのよろこびが日本最初の和歌であったことは喜ばしいことです。心情を吐露した 3 1 の言葉はどれほどの力をもつものなのでしょうか。スサノオノミコトの和歌は、言祝ぎの表現でありながらも意味ある呪術的な力を感じます。夫という立場がこの和歌を生み出したのでしょうか。私の父が死の直前、せん妄状態

になって口にした言葉が「守らないといけない」そんな意味の言葉でした。根源的な人としての喜びや愛する人を守りたいという気持ち、八雲立つという歌を口にすると、そんな情感が湧いてくるような気持ちになります。

歌には相聞というジャンルがあります。それは男女間の愛情のみならず、相手の声を聴き、またこちらからも問うという状態、それを相聞と表現します。相手は人間に限らず広くとらえることも可能です。言葉は言い放つだけの矢ではなく、相手のことばを受け取り、こちらの言葉も受け取ってもらうこと。そんな言葉のキャッチボールがおだやかにできる世界が相聞ではないでしょうか。現実の身近な世界にも、文字や動画や音声が行きかう仮想の世界にも、お互いが情緒をもって相手を聞けるような世界をつくれたら、と一歌人として夢を見ています。

[サンプル原稿は以上となります。よろしくお願いいたします。]